OZ

㈱オーゼットジャパン　☎053-469-5011
www.oz-japan.com

デザインと機能、さらに背景にまで魅了される

イタリア生まれだとか、デザインに優れているだとか、フィアットやアバルトユーザーにOZホイールが好まれる理由はいろいろと推測できる。しかし究極の真意はそこではなく、もっと深いところに存在する。

「もちろんそれらも選ぶときの基準になっていると思いますが、絶対的とまでは言い切れません。多くの要素の中のひとつです。確固たる真の理由、それはOZを取り巻く状況、そういった魅惑の背景があってこそだと断言できます」と核心を語ってくれたOZジャパンの内山晶弘代表。

ユーザーを惹きつけて止まない原因は、作り手のクルマに対する揺るぎないスピリット、目には見えない熱き情熱に他ならない。ユーザーはそういった意気込みの真偽を鋭く見極める。そして本物と判断したならば、どこまでだってついてきてくれる。

OZの誕生は1971年。半世紀もの濃厚な歴史を背負ったブランドだ。設立から13年目には「OZレーシング」を立ち上げて過酷なモータースポーツの世界に参入していった。高い壁に当たったりもしたが、それ以上に勝利も掴み取った。1985年にはフォーミュラの頂点、F1にもホイールを供給。その後はラリー界にも進出していく。そんなあらゆるジャンルに参戦し、輝かしい成績を収めつづけてきた孤高のブランドだ。

「勝ち負けも無視できない要素ですが、それよりも挑みつづける心意気が重要で、その姿勢にみなさんが共感していただいていると信じています。だからこそ、そこから得たテクノロジーやテイストは、少しでも多く市販品にフィードバックできるように尽力しています」

イタリア車に純正採用されるといった、メーカーとの深い繋がりもユーザーは見逃さない。アバルト695ビポストやアバルト124ラリーにOZホイールが正式に取り入れられていることは誇らしく、高揚感がみなぎる。そういった背景を知っていくと、ますますOZワールドに引き込まれていく。

さらにチンクエチェントのPCDは4Hの98で、これはとてもレアであり、設定のないホイールメーカーも多い。ところがOZでは積極的にラインアップ。こういったところからもユーザー思いの姿勢が実感できる。

フィアットの場合は14インチからセットアップできて15、16、17と履きこなせる。大径になるほど力強さや精悍さが強調されるが、重くなることは否めない。逆に小さいと必然的にタイヤの厚みが増えてモチモチした印象になりキュートさが際立つ。と同時に乗り心地だって良くなる。

一方アバルト595はブレーキが大きいので（コンペティツィオーネ）基本は17インチ。ブレーキの逃げが考慮されていれば16インチも可能。売れ筋のボリュームゾーンなので、その充実ぶりは顕著だ！

～WHEEL NAVIGATOR～

アバルト595にマッチする厳選アイテム

Leggenda レジェンダ●17×7+37

右が実際にアセットコルサで使った本物で、左がそのレプリカモデルのレジェンダ。違いを確認するのが困難なほど忠実に再現されている。カラーはレースホワイト、マットブラック、そしてグリジオコルサブライト

サイド・バイ・サイドで熾烈に戦うレースシーンを足もとから支えている強靭なホイールのストリート仕様。本物が持つ力強さを街中で再現できるように生み出されたモデルである

モータースポーツのテイストを余すことなく注ぎ込んで生まれたホイールでスピードを感じるデザインが特徴的。無駄を極力省いた造形はシンプルでどんなルックスにもマッチする

Superturismo WRC
スーパーツーリズモWRC●17×7+35

世界最高峰のラリー競技、ワールド・ラリー・チャンピオンシップのWRCをネーミングに掲げる。ターマックトライアルで使うホイールのレプリカモデルであり、ワークスマシンが持つオーラを足もとから漂わせる。レースホワイトに赤文字がナイス

Ultraleggera
ウルトラレッジェーラ●17×7+35

アバルト・ビポストにも純正採用されている注目のホイール。ただしサイズは7.5×18で市販品には設定されていない。同一のカラーはマットグラファイトシルバーで、他にもレースホワイト、マットブラックが選択できる

Superturismo GT
スーパーツーリズモGT●17×7+35

スーパーツーリズモWRCとは兄弟ホイール。GTレース伝統のマルチスポークフォルムだ。シャープで美しいフィンの造形の魅力をフルに引き出したデザインで攻めている。どこから見ても隙のない作り込みが見事だ

sparco Terra
スパルコ　テラ●16×7+37

ライセンスブランドとして展開しているスパルコのイチオシアイテムだ。オフロードを疾走するイメージが強く、ハイパフォーマンスを発揮してくれそうな頼もしさを感じるデザイン。カラーはホワイト1色となる

アバルトレーシングチームが開発を担当した競技車両のアバルト124ラリーの足もとにはOZのホイールが装着されている。2018年 と2019年 にR-GTカップを連続で制覇したマシンに使われていることも、注目せずにはいられない

アバルト系を得意とする注目のイタリアのチューナーブランドであるカダムーロデザインが自社で製作するデモカーには、ほとんどOZのホイールを装着。クオリティ重視でセレクトされていることにトレンドに敏感なユーザーは気づいているはずだ

初代を絶妙にオマージュした斬新さが足元に映える！

Rally Racing
ラリーレーシング

コンディションの悪いグラベルを疾走するイメージが強いものの、舗装路でも違和感は伝わってこない。オフロードを感じる強靭さが上手い具合にアクセントになって独特な風合いを醸し出す

模範的なアバルトとのマッチングを披露。グリジオカンポボーロにグロスブラックが絶妙なコーディネイトを実現。伝統を感じるディッシュデザインが冴え渡り、足元から力強く堂々と主張している

荒々しさを携えた初代モデルの個性を崩すことなく、品の良さも注ぎ込む。こうして懐かしさを感じつつも新しい形状を構築。カラーはグロスブラックの他にレースホワイトとダークグラファイトがある。サイズは7×17+35

どこから見ても80年代後半から90年代にかけてラリーで大活躍した初代を忠実に継承していることがわかるが、洗練度も確認できる。特にディッシュの外周からフランジへと伸びるツメの形状の繊細で強靭な味わい深さが貢献している

ジャパンオリジナル16インチも誕生

16インチはOZジャパン専用のラインアップ。フローフォーミング製法による軽量化も追求している。カラーはダークグラファイトとグロスブラック。反響によってレースホワイトにも対応する。サイズは16×7+35

16インチでもアバルト595のビッグサイズのブレーキに対応できる。もともと起伏が穏やかなディッシュデザインなので、裏側も張り出しが少ないのだ

16インチモデルでも17インチと同様に、ツメの雰囲気が全体の印象を華やかに演出する。直線でなく角度がついた造形が秀逸なデザインだと痛感

OZらしさを色濃く反映したホイール。それがラリーレーシングだ。1988年にWRCで勝つために生み出されたグラベル用の競技ホイールをベースに、市販車への装着を前提としたレプリカモデルで、その特徴的なディッシュデザインからは石はねや土埃からブレーキをガードするスパルタンな機能美がほとばしる傑作フォルムだ。

その後しばらくしてカタログから姿を消していたが、2017年にはよりモダンにリメイクされて復刻。初代の無骨さを残しつつ、現代でも通用するスマートなテイストも導入。こうしてほどよくワイルドでクラシカルな雰囲気も漂わせるスタイリッシュな新生ラリーレーシングは展開を再開した。

このアプローチが正しかったことは現在、日本ではOZアイテムのなかでラリーレーシングがもっとも売れているという事実から納得できるはずだ。

復刻モデルは17、18、19インチの展開で、チンクエチェントには17インチモデルがマッチする。限りあるスペースをフルに使ったディッシュ形状なので、十分な押し出し感が得られて存在感を主張する。もちろんダイナミックなブレーキで武装しているアバルトモデルでも難なく履きこなせる。

17インチに少しも不満はないもの、クラシカルなルックスが注目されている時代を鑑みて、日本から16インチモデルを提案した。本国OZも快諾して追加を決定。こちらは日本製で、OZとは関係が深いエンケイが製作を担当。デビューは2020年5月。

あえてのインチダウンという選択は意表を突く展開ではあるが、チンクエチェントのサイズ感には16インチのほうがマッチすると思うユーザーも少なくないはずだ。嬉しいことにアバルトにも対応可能である。

迫力を優先するよりも、軽さによる足さばき向上を重視するというマニアックな捉え方が意外に支持されそうな予感がする。

OZ